

## 2013年カツオ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数						量							
	漁獲	産地		輸入	輸出		東京生	消費支出生(%)	消費支出鰹節(g)	在庫	加工品			
		生	冷		生	冷					缶	削	節	生利
24	289	45.9	212.6	28.7	32.9	0.1	9.4	919	287	20.6	11.5	18.1	32.3	2.3
25	300	61.4	207.4	21.2	44.1	0.1	11.2	1,002	274	21.3	-	-	-	-
%	104	134	98	74	134	138	120	109	95	103	-	-	-	-

年	価									
	産地		東京生	輸入	輸出		消費支出生(%)	消費支出鰹節(g)		
	生	冷			生	冷			缶	
24	372	187	605	156	145	713	1,391	928		
25	319	200	543	170	186	528	1,536	904		
%	86	107	90	109	128	74	110	97		

### 漁業・資源・漁獲

日本のカツオ漁業は、千葉以南の沿岸や伊豆諸島周辺で行われている曳縄を別にするると大別し一本釣りとまき網に分けることができる。また、カツオの漁獲量の大半がこの2つの漁種により占められている。

中西部太平洋におけるカツオの大部分は熱帯域で漁獲され、残りのほとんどが日本近海で季節的に漁獲されている。西部熱帯域では、インドネシアやフィリピンの近海漁業による漁獲が主要な部分を占める。中部熱帯域では、遠洋漁業国及び島嶼国のまき網漁業の漁獲が卓越している。中西部太平洋で漁獲されるカツオの尾叉長は概ね40～60cmが主体であるが、20～40cmの個体の大部分はインドネシア、フィリピン水域で漁獲される。中西部太平洋におけるカツオの漁獲は、主に日本により行われてきた。竿釣りは江戸時代から始まり、大正初期に漁船の動力化が始まると漁場は急速に広がり、台湾北西部や小笠原諸島近海まで出漁するようになった。さらに、南洋諸島が日本の委任統治領となると、サイパン、トラック、ポナペ等を基地とした現地操業も始まった。昭和に入ると冷凍魚も扱われるようになり、漁場は日本の東北沖では沖合600マイル、南方ではマリアナ諸島、スルー海まで広がり、日本近海での季節的操業に限定されず、近海から遠洋までほぼ周年にわたって操業するものも増え、戦前のピーク時には10万トンを超える漁獲量に至った。戦後まもなく大戦による落ち込みから回復し、1952年にマッカーサーラインが撤廃されると、漁獲量は1960年前後には10～17万トン、1970年には20万トンを超え、1970年代後半には30万トンを超えた。この間の漁獲の伸びは主に竿釣りが中心であったが、漁場の拡大に伴う活餌保持の問題と燃油高騰等の経済的要因から、遠洋竿釣り漁船数は減少し、漁獲量の伸びは停滞した。1980年代には各国のまき網船による熱帯水域漁場の開発も始まり漁獲量の急増期に入った。中西部太平洋における漁獲量は1970年代まで40万トン台であったが、1990年代には100万トン前後に増大、さらに2002年には120万トン、2009年には180万トンに達したが、2012年は164.8万トンに減少している。この間、竿釣り・まき網両漁業ともに、漁具の改良に加え、操業機器の開発・改良（低温活餌槽、海鳥レーダー、ソナー、人工浮漁礁（FADs）等）と情報収集能力（衛星情報、インターネット利用）が向上した。中西部太平洋における2012年のカツオの漁獲量は、164.8万トン

で歴史的4位の高漁獲となり、全太平洋の漁獲量192万トンの86%を占める。漁法別漁獲量（暫定値）では、まき網が134万トンで81%、竿釣りが15万トンで9%、その他の漁業が16万トンで10%である。まき網については日本、韓国、台湾及び米国の遠洋漁業国が近年の漁獲量の5～6割を占め、他はインドネシア、パプアニューギニア、フィリピンが多い。竿釣りは、2005年頃まで日本が約6割を占めていたが、次第に減少し、2006年以降は1位をインドネシアに譲り、日本は近年4割ほどになっている。国別漁獲量は、2009年を除き2010年までは日本が1位であったが、2011年には24万トンに減少し、インドネシアが27万トンで1位となった。近年、韓国、フィリピン、台湾、米国が15～23万トンほどで拮抗している。日本近海は本種の分布縁辺部にあたり、漁獲は資源量と北上回遊・漁場形成に係わる海洋環境に影響される。日本近海の漁獲量は、1970年代以降9～21万トン（北緯20度以北）で推移している。常磐・三陸沖漁場が中心的漁場となっているが、漁獲量の変動が激しく、1970年代以降では2～14万トン（北緯35度以北の竿釣りともまき網の合計）である。この漁場では、竿釣りに加え、まき網操業が1980年代後半から増加している。2012年の常磐・三陸沖漁場の漁獲量は、近海竿釣り2.6万トン、北部まき網1.7万トンであり、2002～2011年の10年平均値（竿釣り3.7万トン、北部まき網2.8万トン）に比べて竿釣りもまき網も下回った。

インド洋では、2006年の総漁獲量は61万トンとなり過去最高を記録したが、その後急減し2012年には31万トンとなり（ピーク時の51%）1994年以来最低となった。この原因は主として、ソマリア沖海賊の活動海域が拡大し、EUまき網漁船が操業を自粛したり大西洋へ移動し漁獲努力量が減少したことによる。

総漁獲量は1950年から年々微増し、1983年には8万トンを超えた。西インド洋でまき網が本格化した1984年に総漁獲量は10万トン台、1988年に20万トン台、1993年に30万トン台、1999年に40万トン台、2005年に50万トン台、2006年に60万トン台と急増した。しかし2007年以降は、ソマリア沖海賊の活動範囲が拡大し、多数のEUまき網漁船が操業を自粛したり大西洋へ移動したので、漁獲量は急減し、2012年には31万トンとなり1994年以来最低レベルとなった。最近5年間（2008～2012年）の平均漁獲量は40万トンと推定されている。漁獲量の多い上位6か国は、インドネシア（5年間の平均漁獲量：7.6万トン）、モルディブ（6.7万トン）、スリランカ（6.5万トン）、スペイン（6.3万トン）、セーシェル（3.3万トン）、イラン（3.1万トン）となっている。最近5年間の平均漁獲量のうち、42%がEU（スペイン、フランス）とセーシェル等のまき網漁業、27%が流し網漁業（主にインドネシア、イラン、スリランカ）、20%がモルディブなどの竿釣り漁業、12%がその他の漁業という内訳になっている。2006年までは全漁業の漁獲量が増加する傾向にあったが、そのうちまき網の漁獲増大の比率が高く、浮き魚礁（FADs）の利用拡大によるところが大きかった。まき網による漁獲のうち、最近では80%以上がFADs操業によるものである。また、西インド洋（FAO海域51）と東インド洋（FAO海域57）における最近5年間の平均漁獲量の割合は、63%、37%となっている。インド洋における日本のカツオ漁獲は、ほとんどがまき網によるものである。インド洋における日本のまき網漁業は、1957年からまき網船（民間船）1～2隻が1980年代半ばまで操業していた。1988年以降は、漁船数が増加し最大時にはまき網船数は11隻（1991～1994年）となり、1992～1993年のカツオの漁獲量は3万トンを超えた。また、1977年より30年間以上にわたって、独立行政法人水産総合研究センター開発調査センター（旧：海洋水産資源回月センター）の調査船「（新・旧）日本丸」がインド洋全域で試験操業を行っている。1994年以降まき網漁船

コメントの追加 [i1]: EUまき網漁船の操業自粛や、

コメントの追加 [i2]: 上記にも同じ表現強めるためですか？

数は徐々に減少し、最近5年間（2008～2012年）では日本丸の試験操業及び0～2隻のまき網船（民間船）のみで、カツオの漁獲量は1,400～3,400トンで推移している。

インド洋における資源評価は今まで実施されていなかったが、2011年の第13回熱帯まぐろ作業部会で資源評価が行われ、漁獲努力量も資源量もMSYレベル以下にあり過剰な漁獲圧や乱獲状況でないことが分かった。資源評価の結果を用い将来予測を行った結果、2010年の漁獲量（43万トン）レベルないし最近5年間（2006～2010年）の平均漁獲量（49万トン）レベルを2020年まで継続しても、資源量・漁獲努力量のMSYレベル維持できない確率は低いことも分かった、とされている。インド洋の資源は、現在資源水準は高位でその動向は横ばい傾向にある、とされている。

また、国内需給問題では、冷凍のカツオ船（釣り、巻）の入港隻数の減少（焼津）が顕著であったことや、市況もバンコクの市況に大きく左右される構造があり、また、燃油問題や資源問題も含めて、今後の経営不安要素も少なくない。

本年のカツオの漁獲量は、30万トンであった。

## **産地水揚量と価格**

25年の産地水揚量は、26.9万トンで前年（25.8万トン）を4%上回った。

内訳は、生6.1万トン、冷20.7万トン（前年：生4.6万トン、冷21.3万トン）であった。

本年の生鮮（日本近海）の漁況は、釣りの初漁期（1～4月：犬吠埼以南の本邦南岸域漁場）は近年になく好調で昨年を大きく上回った。5月以降も好漁は続き、最近ではこの時期の釣船はビンナガ操業の船も多いが、カツオ漁況は総じて好調に推移した。そして黒潮前線を越えてからの漁況も引き続き好調で、結果近年では最も良かった2010年並みで、近年では極めて好調な漁が続いた1年であった。

一方まき網漁は、例年ピークになる6～7月に今年もまとまった漁獲となり、低調だった昨年、一昨年来を大幅に上回る水揚を記録した。

海域別漁獲量は、三陸40%（前年：44%）、犬吠～常磐33%（前年：32%）、南西・東海2%（前年：2%）、九州西部8%（前年：6%）九州南部17%（前年：15%）であった。

本年も漁場形成の主体は三陸・犬吠埼沖合海域主体であったが、上述の通り初漁期の薩南や小笠原～豆南海域での漁も今年は近年になく比較的好調であった。

南方竿釣りのカツオ（東沖を含む）焼津						海外まき網の状況（焼津）					
年次	単位		24年	25年	前年比(%)	年次	単位		24年	25年	前年比(%)
水揚隻数	隻	延	159	149	94	水揚隻数	隻	延	173	141	82
水揚量	トン	計	37,753	38,361	102	水揚量	トン		113,766	96,270	85
々	々	カツオ	21,401	24,479	114	1隻当たり	々		658	683	104
々	々	キハダ <sup>キメジ</sup> 他	16,352	13,882	85	水揚金額	100		20,830	19,419	93
1隻当たり	々	計	237	257	108	1隻当たり	万円		120	138	114
水揚金額	100	計	10,219	8,857	87	価格	円/kg		183	183	100
1隻当たり	万円	計	64	59	92	水揚量	トン		92,318	78,310	85
価格	円/kg	平均	271	231	85	1隻当たり	々	カツオ	534	555	104
々	々	カツオ	264	247	94	価格	円/kg		168	194	115
々	々	キハダ <sup>キメジ</sup> 他	279	237	85	水揚量	トン		18,954	15,825	83
						1隻当たり	々	キハダ	110	112	102
						価格	円/kg		264	250	95
						水揚量	トン	メバチ	2,303	1,973	86
						々	々	その他	191	162	85

冷凍カツオは、竿釣り（焼津）は南方が前年（1.3万トン）をやや上回る1.4万トン、東沖が前年（0.9万トン）をやや下回る0.7万トンで南方、東沖とも前年をやや下回った。一方、本年の海巻き（焼津）は、カツオがほぼ前年並みで、キハダ（キメジ）、メバチ（ダルマ）とも引き続き前年を下回った。

### 消費地入荷量と価格

25年の東京消費地の入荷量は、生1.1万トンで前年（生0.9万トン）を上回った。

近年カツオの入荷のピークは最近東京では6月にみられることが多くなっている。しかし本年は7月にピークがみられるなど、好漁年（平成22年）の特徴が出た年となった。今年は初漁期から漁が好調だったこともあって、前半から入荷が多く、8月まで前年を上回る入荷で、その結果年間の入荷量は前年をかなり上回った。

近年カツオはB1製品の定着の中で市場外流通主体に鮮魚が少ない時には「タタキ」や東沖「トロカツオ」等、カツオは周年商材として出回っている。本年も末端小売では、カツオ製品を切らすことなく出回っていた。

本年は、初夏の出回りが多くなる時期（上半期）に多かったこともあり、末端での消費も数量、金額とも昨年を上回った。

価格は、543円で入荷量の減少を反映し、前年の605円を下回った。

### 在庫量

在庫量は、2.1万トンで国内生産増加、輸入減少の中で相殺され、前年（2.1万トン）並みであった。

### 輸出入

カツオの輸出は、原魚と缶詰に分かれるが、缶詰輸出は既に国際競争力はなく、年々少なくなつて極僅かになっており、今年も非常に少なかった。

本年は、原魚4.4万トン（前年：3.3万トン）、缶詰91トン（前年：66トン）であったが、原魚輸出は缶詰用として貴重になっているが、本年は国内漁も増加したことで、前年をかな

り上回った。

輸入は今までの円高傾向から一転為替円安傾向(79.6円→97.7円)となり、輸入業者にとっては厳しい環境になった。こうしたことと冷凍カツオの市況の高騰もあって、原料輸入は少なくなり、2.1万トンで前年(2.9万トン)をかなり下回った。

したがって輸入価格は、170円で前年(156円)を引き続き上回った。